

小琉球嶼に於ける先史遺跡*

金 関 丈 夫 ・ 国 分 直 一

Prehistoric sites in Hsiao-liu-chin Island (小琉球嶼).

By

Takeo KANAZEKI and Naoichi KOKUBU

The authors' research work in May, 1948 on the Hsiao-liu-chin Island brought some perspective concerning the culture of the pre-Chinese inhabitants extinguished long before. We found: The earth bed in a cave called Wu-kuei-tun (烏鬼洞), a prehistoric village site near Ta-liao (大寮) and a cemetery at Ta-liao. The stone-cists of Ta-liao which suggest the burial in stretched position have a close resemblance to those of Ken-ting (墾丁).

(一)

小琉球嶼は高雄東港の西方海上約15kmにある孤島である。若い第三紀層（地質学者の所謂苗栗層）上に不整合に乗った古い珊瑚礁が表面をなすものである。つまり隆起した珊瑚礁である。島は北東から南西に延びその周囲は約12km 表面は全体としてやや平坦で、その平均の高さは75m内外である。島の長軸の方向とそれに略直角の方向とにいずれも島を中斷する断層帯があつて、それによつて島は多少の高低の差をもつ四つの区域に分かたれる。地表が石灰岩層であり、海岸は絶壁をなしているの、全体としては農業と認めうべきほどのものはなく、島の北部に僅かに展開する低地に僅かな耕作地を見るのみである。海水は清澄、海岸にはこの珊瑚礁から引きつづいて若い隆起珊瑚石灰岩があり、一面のカルストを形成している。島民は漁撈に従事しているが、家庭では花鹿を飼育しているものが多い。

この島については民族学的な関心がかなり早い時代から示されている。この島の先住民についての最初の記載は黄叔敬の蕃俗六考に「新港蕭壠麻豆各番昔住小琉球後遷於此」と見えていることである。次に知られている記載は鳳山県探訪冊中に見えるものである。

小琉球嶼天台澳石洞相伝旧時烏鬼蕃族而居後泉州人乘夜放火尽燔斃之と見えている。伊能嘉矩氏は以上の記載を大日本地名辞典台湾之部134～135頁に於いて引用し、更に「東港の人洪占春の実査によれば該遺跡より古土器及び白螺銭を得たりといふ」と附記している。伊能氏はこの遺跡を和蘭時代南台湾にはいつた黒人系奴隸の余喘を山陬海島に退保せるを告ぐるものでないだろうかと考えられた。然しながら遺跡の状況を実査するとその推測の誤まれることが明かとなる。

尙刊行されたものではないが小琉球嶼警察官駐在所に伝えられる須知簿によれば次のような

*水産講習所研究業績 第208号

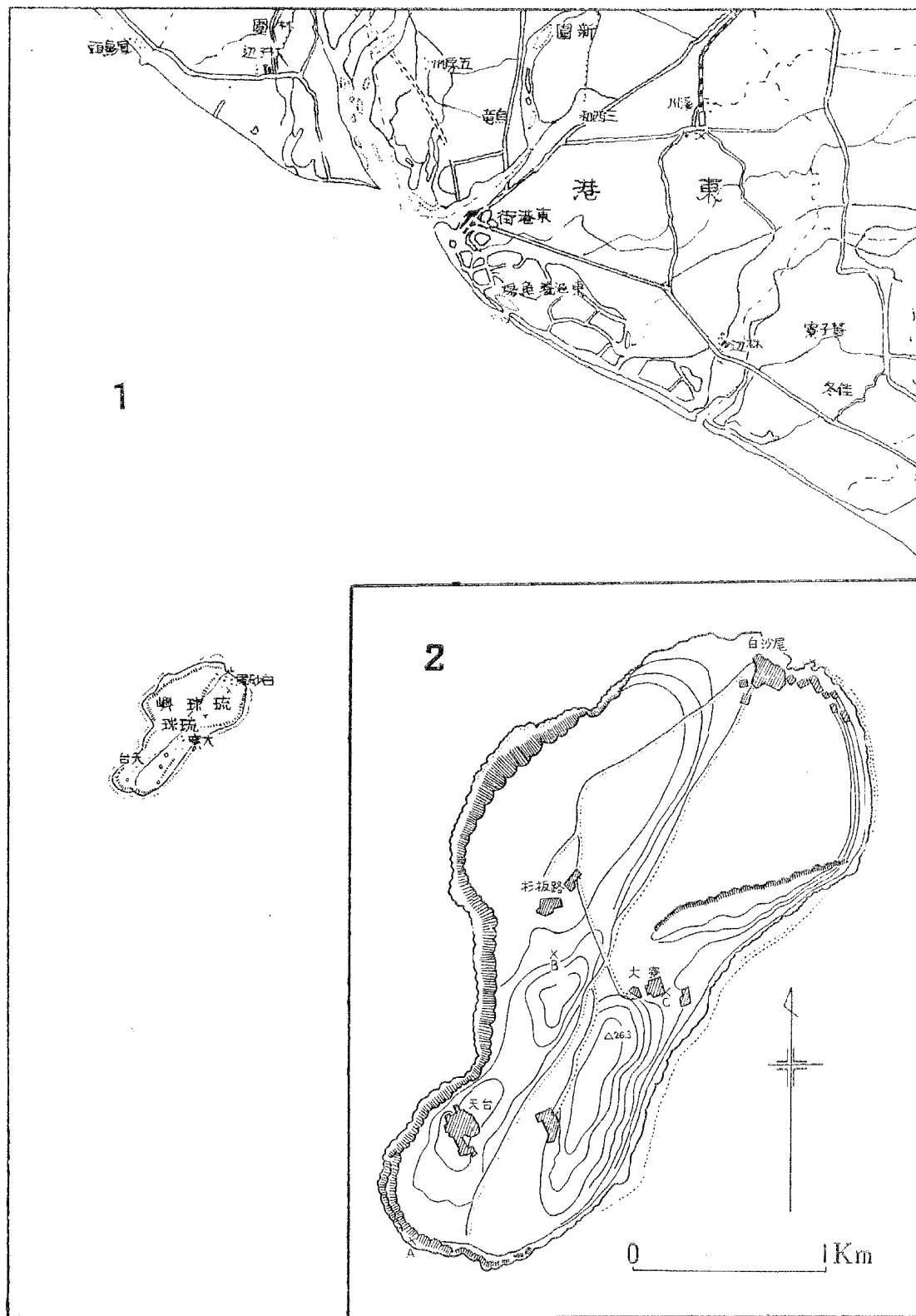


Fig.1. Map of Hsiao-liu-chia Island (小琉球山与).

Fig.2. Showing the distribution of the prehistoric sites in Hsiao-liu-chin Island.

Site A : Wu-Kuei-tun (烏鬼洞).

Site B : Prehistoric Village site.

Site C : Cemetery at Ta-liao (大寮).

伝説が記録されている。

「嶼は開基前に於ては沙馬磯嶼と云ひたるものの如く口碑に依れば嶼には身軀魁偉に頭髮紅く皮膚黒くして魅力を有し、水中に入りて克船筏を覆没し人にして人にあらざる烏鬼蕃と称する一族今の天台の南西に穴居し居たりといふ。然るに康熙元年今を去ること約二百五十余年前に洋人一小艇にて来り上陸せんとせしに彼等烏鬼等は之れを覆没したり。茲に於て洋人等は夫に激怒し依て本船より多数の船員上陸し来りて殺戮せりといふ。其穴居は砵砧石の洞窟にして今尙天台の西方海岸に存在せり。其より後現今の山脚部落に居住する熟蕃人種の一部居住したるも今より約百五十年前に時の清国人続々移住し雜居に堪へずして元の港東西里放棄庄に転住せりと云ふ。現今天台の一部に蕃人厝といふ土地名あり、元熟蕃人種の居住せし跡なりといふ」

以上の須知簿記載は伝説を記載したものであろうが、鳳山県採訪冊の漢蕃衝突の記事とやや趣を異にしている。然し烏鬼蕃遺跡としての記事は一致する。

台湾文化三百年記念の史料展覧会が開かれた時には高雄州東港郡役所は小琉球嶼の烏鬼洞の写真を出品した後、台湾資料集成中にかかげている。解説には「高雄州小琉球嶼天台嶼に在る石洞は俗に烏鬼洞と称し今を去る三百年前蘭人の同行し来りたる黒奴が一時避難したる洞窟にして洞内三疊數位あり曾ては彼等の遺品たりと覚しき古器物を洞内より発見したることあり」と見えている。即ちほぼ伊能説に従い、更に洞内の様相、出土器物についての記事を加えたものである。（台湾史料集成（台湾文化三百年記念会刊行）P. 45）。

その後小琉球の先史遺物についての重要な見聞をはじめて報告したのは早坂一郎博士である。博士は林朝啓教授（台湾大学地質学教室）との共著「台湾考古資料」（台湾地学記事 5巻1号1934）に於いて小琉球嶼の地表を構成する隆起珊瑚石灰岩（所謂琉球石灰岩）上の赤色表土中に土器の破片、貝殻加工品等の産出することにふれている。

尙同島の先住民と台湾本島の原住民族の間に交渉を有していたとする伝説がある。蕃族慣習調査報告書 第5巻の1, 191頁には「古代ノ小琉球嶼人ニ関スル伝説」なる記載がある。

小琉球嶼ハ東港ノ西方に横ハレル島嶼ニシテ平地ニ近クノ本族（パイワシ族）ノ部落ヨリ遙ニ之ヲ望ムコトヲ得ヘシ。本族ハ之ヲキボアト云フ。リキリキ社以南ノ番人ハ曰ク此キボアニモ昔ハ我等ト同様ノ番人住メリ。彼等ハ時々舟ニテ西方ノ海岸ニ来リ我等ト物品交換ヲ行ヒタリト。尙枋山、枋藁ノ中間ニ在ル平埔庄ハ右キボアノ民カ来リ開キタル部落ナリト云フ。又内文、スボン、リキリキの三社ニハキボアノ民カ来テ其社民ト為リタル伝説アリ。即チ内文社ニ於テハ昔該社民ロジャ・キジャント云フ者平地ニ降りタルニ見慣レヌ風ヲ為シタル人ニ出会シ之ヲ訪何シタルニ「我ハキボアノ人ナリ」と云ヘリ。乃チ之ヲ伴ヒ帰リパソソ家ノ嗣ト為セリ。又リキリキ社に於ては昔キボアヨリ一人当社ニ来住セリ。其ノ状貌我ばいわぬト異ラス。其の子孫は今日ゾスカゾヌ家トシテ現存セリト云ヘリ。又此ノ小琉球嶼民ハ西方海岸ニ上陸シテ一ノ部落ヲ立テタリ是今日ノ平埔庄ナリ。

筆者らは1948年5月20日小琉球嶼を実査し、上述の烏鬼洞をはじめとして他の二ヶ所蕃仔厝及び大寮の先史遺跡を調査した。その結果小琉球嶼の先史遺跡が恒春半島の墾丁をはじめとする西海岸南部地方の赤褐色無文壺型土器を主体とする先史遺跡と文化様相に於いて酷似していることを見た。この事実と上述の「古代小琉球嶼人ニ関スル伝説」「蕃族六考」中の伝説と思ひ合せて見る時、台湾西海岸南部地方の先住者の系統を考える上に重要な手がかりを見出し得るように思われる。

(二)

I 烏鬼洞の遺跡。(Fig. 2—A地点) 筆者らは1948年5月20日に小琉球嶼の調査の機会をもつた。我々は先づ全島西端奥仔口港の近くにある烏鬼洞なる伝説の洞窟を調査した。その結果洞窟内部の崩壊が著しく進行していることを知った。然し洞奥には土床の存在していることを知った。

洞窟内はこの土床をなす奥の部分と前庭をなす空間の部分とより形成されている。(Plate 1)

土床は縦、横、高さほぼ30cm乃至40cmの立方体の土角を洞外に於いて製作したものを洞奥に敷きならべて作ったものであらうと見られた。台地を被覆する黄色を帯びた赤褐色の粘土が用いられていることから想定されるのである。全土床の奥行はほぼ6mあつたが身を横たえるに可能な土床の空間はほぼ4m×3m、高さはその部分で1mに過ぎない。

洞窟前庭の部分の岩砕を一部除去した所、鹿科の顎骨、長管骨の他に砂質を混じた赤褐色の先史系土器の断片及び褐色の釉を有する中国系日常用陶器片及び俗に安平壺とよばれている中国製白色磁器片を得た。洞窟前庭の部分は天井の落盤により前庭部分は岩砕により埋没した部分が多く、行動は甚しく困難であつた。遺物は岩砕の一部を除去することによつて得られたが、落盤が甚しいために調査は極めて困難であつた。

II 蕃仔厝遺跡 (Fig. 2—B地点) 烏鬼洞の北方に天台なる集落がある。そのやや北方に、蕃仔厝とよばれる地区がある。人家なく我々の調査当時は落花生の畝になつていた。遺物は畝中に露出している他に、道路工事のために削りとられた部分にも露出していた。発掘を行う時間がなかつたので、遺物は表面採集によつてえたものである。

土器。(Plate V) 土器は赤褐色無文の壺形、有頸にして、口縁は外反している。極めて広口にして厚手、口縁は僅に有頸外反する形式のものもえられた。(Plate V.)

その他赤褐色の土錘一例がえられた。(Plate VI, Fig. 12) 底部としては平底に近い安定感のあるもの一例が得られた。(Plate V.)

石器 (Plate VI, Fig. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8) 注目すべきものとしては橄欖石玄武岩 (Olivine Basalt) 製の磨製石斧2例がある。(Plate VI, Fig. 4, 6) その石材は澎湖島に豊富に産出する。台湾本島西南海岸遺跡には澎湖島産の礫状原材をとどめている遺跡がある。上述の2標品は形式に於いて台湾本島西南海岸遺跡出土の橄欖石玄武岩石斧に酷似している。

砂岩打製の鳥田髻式の石斧1例 (Plate VI, Fig. 7) も注目すべき資料である。同形式の石器は紅頭嶼に行われているが、台湾本島東海岸南部の紅頭嶼との交渉の考えられる沿岸地方にも見出されている。

その他砂岩の凹石 (Plate VI, Fig. 8), 硬砂岩礫の一部を打ち欠いて加工の跡をとどめるもの (Plate VI, Fig. 3) 硬砂岩礫の片面を割断し、片面は自然の礫面を利用しているもの2例 (Plate VI, Fig. 1, 5) がえられた。

以上の如き先史系遺物は褐色の釉を有する近代中国陶片 (おそらくは明以後の日常用器) と共存していた。共存は散布の状況からも、畝中に作られた溝渠の断面に見られる包含状況からも観察された。それらの近代中国陶片中には烏鬼洞内に見出されたと同様の白色磁器片も見出された。

尙遺跡中には常食に供されたものと思われる貝類の散布も見られた。その種類をあげれば次

の如くである。

- 1 *Strombus (Aliger) latissimus* Linne (ゴハウラ)
- 2 *Strombus* sp (S. cf. *thersites* Soweby)
- 3 *Tridachnes* sp (シャコガイの一種)

蕃仔厝と烏鬼洞の關係。 蕃仔厝の遺物には先史土器片に於いても近代中国陶片に於いても共通するものが見られるので、蕃仔厝に於ける先住民の一部が何らかの事情によつて洞窟を住居として利用したものではなからうかと考えるのである。その事情がなんであるかは問題であるが、漢蕃抗争その他、先住者と外来者の抗争を伝える伝説があることから考えて、蕃仔厝に於ける先住民の集落がより有力な後來民族によつて襲撃を受け潰滅するに至つたという如き事情があつた際、敗残者の一部が一時的に利用したものではなからうかとする推定に導かれるのである。

Ⅲ 大寮の石棺遺跡 (Fig. 2—C 地点, Fig. 3) 蕃仔厝遺跡のほぼ東方, 中央地溝帯の東側海岸低地に大寮とよばれる集落がある。金子寿衛男氏はかつて同地附近の畝中から榿石玄武岩の小破片を得たという。同地を調査するに民家の間に介在して、石棺の輪郭或いは石棺の一部痕跡を留めるもの等九例の存在が明かになつた。

現集落のすぐ東側には小流があり、集落の北東方には集落に關係ある漢人墓地がある。発見された石棺遺構は9例に過ぎないが、民家の築造、漢人墓地の造営等によつて石棺遺跡が破壊され、或いは消滅せしめられた部分のあることは想像されうるのである。

石棺は組合石棺にして、石材は同島に於いて最も容易に採集出来る珊瑚石灰岩を用いている。人骨の発見されたものはFig. 3の No. 1 石棺のみである。同石棺に於いては頭部を北東にしていた状況が明かになつた。No. 2, No. 3 石棺も北東部にやや広い構造を示していたので、頭部を北東にしていたことが想定される。No. 4—No. 9 石棺は破壊されていて構造は不明であるが、No. 1—No. 3 の例から見て同一頭位を示していたであろうと推定して誤りないと考えている。

石棺	棺長	幅		備考
		頭位	足位	
No. 1	224cm	61.5cm	56cm	人骨下半身部残存
2	170cm	62cm	58cm	
3	180cm	55cm	47cm	
4	不明	47cm	不明	頭位附近から貝加工品発見
5	194cm	61cm	〃	
6	不明	不明	〃	
7	〃	〃	〃	
8	〃	〃	〃	
9	〃	〃	〃	

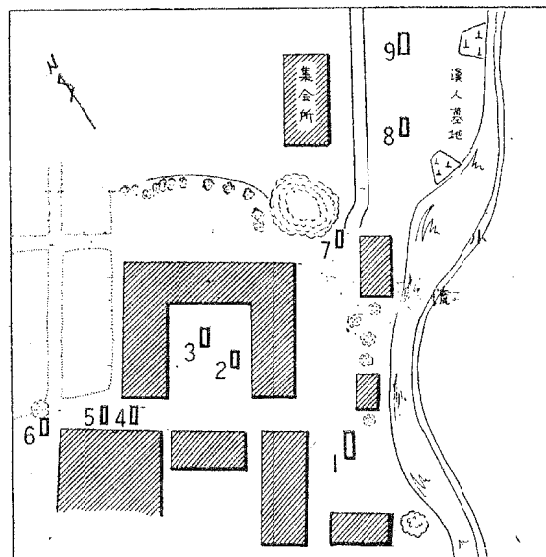


Fig. 3. Sketch map showing the distribution of the stone-cists at Ta-liao (大寮). Locations, No.1—9, indicate the distribution of the Stone-cists.

石棺の規模を示すために計測値をあげておく。計測は内径について行つた。No. 4, No. 5 石棺は北東位に於いてのみ幅の計測が可能であつた。この場合も北東位を頭位と考えて表示する。

以上の何れも棺蓋に当る石材は失われていた。棺材の消失、構造の破壊は石棺遺跡の上に集落が営まれたために、表土層が失われ、その際、棺材の消失と構造の破壊が行われたと思われる。痕跡を示さない迄に破壊消失を見てしまつたものもあるであろうことはFig. 3によつて現存の石棺分布図を見れば推定出来ると思う。

No. 1 石棺中の埋葬状況を見るに、下半身の大部分が埋葬時の姿勢に於いて明かにされた。仰臥伸展の姿勢である。骨盤の附近に手指をふせて延した形に於いて右方の掌骨が発見されたから、手を体側に延した仰臥伸展の姿勢をもつて埋葬されたことが明瞭になつた。上体は墓地表層がけづり取られた際に棺蓋とともに運び去られたものと思われる。発掘を行つた結果、棺底材を用いてないことが判明した。棺底に見られる砂層は海辺に見られる新鮮砂と同様の新鮮な状況を示していた。

No. 1 石棺以外の石棺からは人骨は発見されなかつた。然しNo. 4 石棺からは頭辺と思われる位置から夜光貝殻軸の真珠層に穿孔（未貫）の痕を留めるものが得られた。（Plate VI, Fig. 11）

石棺地帯から橄欖石玄武岩製の石斧の断片（Plate VI, Fig. 2）貝製小円盤（Plate VI, Fig. 10）各1例が得られた。採集された玄武岩石器の器面の風化状況は蕃仔厝遺跡採集の玄武岩石器の器面の風化状況と酷似していた。

我々は大寮の石棺遺跡は蕃仔厝遺跡を遺した先住民の墓地であろうと考えるものである。この集落址と墓址との関係は紅頭嶼に見られる Yami 族の集落と墓地との関係の如きを示すものでなかろうかと考えるものである。

紅頭嶼に於いては Yami 族は赤土層の海岸台地或いは傾斜面を切つて階段状に整地して集落を営み、集落からやや離れた海辺の砂層に共同墓地を営んでいる。かくの如き関係が蕃仔厝遺跡と大寮遺跡との間に考えられるのでなかろうかとするものである。

（三）

石棺の構造からいい埋葬様式からいい、遺物の様相からいい最も密接な関係の考えられる遺跡は恒春半島の墾丁遺跡であろう。墾丁に石棺遺跡をとどめた先住民と同系の先住民が小琉球嶼を占拠していたものではなかろうか。

その場合小琉球嶼が基地であつたのでなく墾丁を中心とする恒春半島地方に基地があり、小琉球嶼はその colony をなしていたものと見てよいのではないかと考えている。

墾丁、小琉球嶼地区は紅頭嶼を含む台湾本島東海岸南部地区及び澎湖島を含む台湾本島西海岸南部地区と深い交渉をもつたであろうことは、紅頭嶼系の石器の分布、澎湖島産の玄武岩を用いた器形の酷似する石器の分布から見て、又土器の状況から見て想定されうることである。然してこれら地区の先住民の關係交渉は歴史時代初頭に及んだと思われる。然しながらその頃から漢蕃の交渉が始まるのである。最初に述べた諸伝説を通して、近代中国陶片、先史系土器、その他の遺物の混在する状況を通して想定されるのである。

PLATE

PLATE I

Upper : Vertical section between A and B indicated on the plane figure.
Lower : Plane figure of the cave called Wu-kuei-tun (烏鬼洞).

PLATE II

View of Ta-liao.

PLATE I

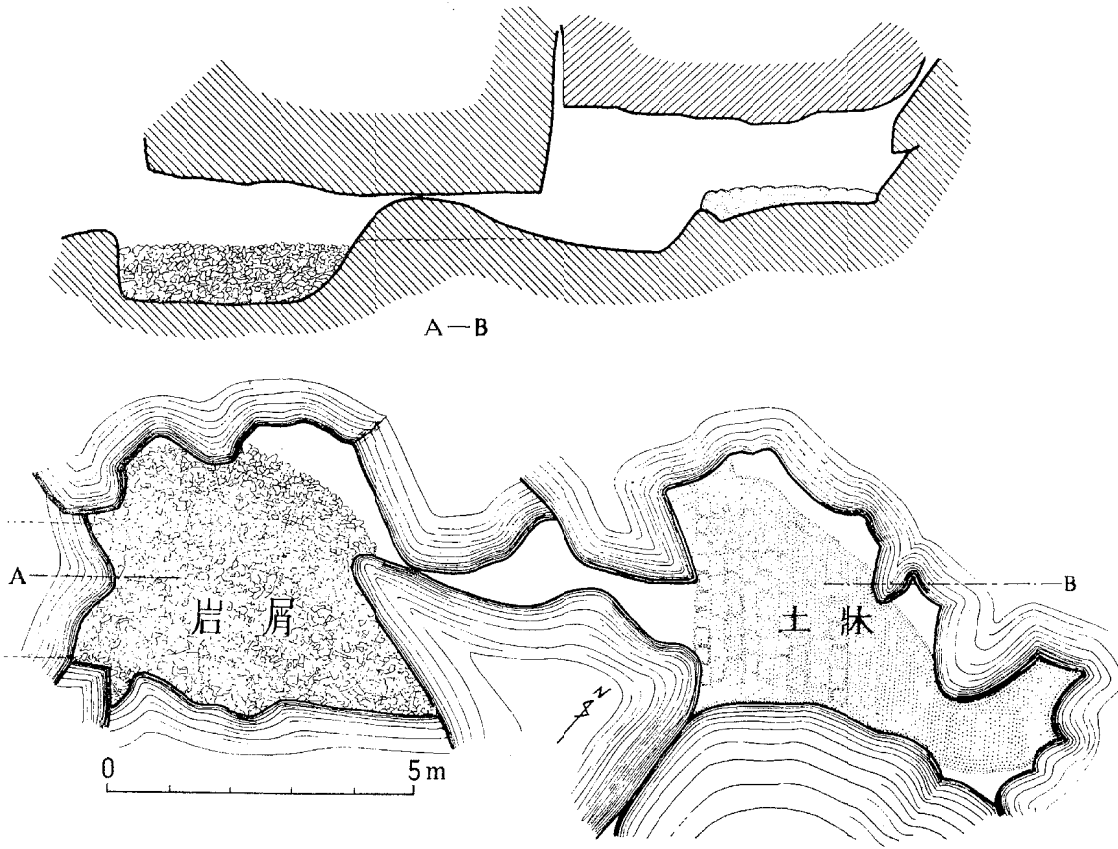


PLATE II



PLATE III

1. Stone-cist, No. 1, indicated on the map in Fig. 3. Pay heed to the buried skeleton.
2. Stone-cist, No. 2, indicated *ibid*.

PLATE IV

3. Stone-cist, No. 3, indicated on the map in Fig. 3.
4. Stone-cist, No. 4, indicated *ibid*.

PLATE III

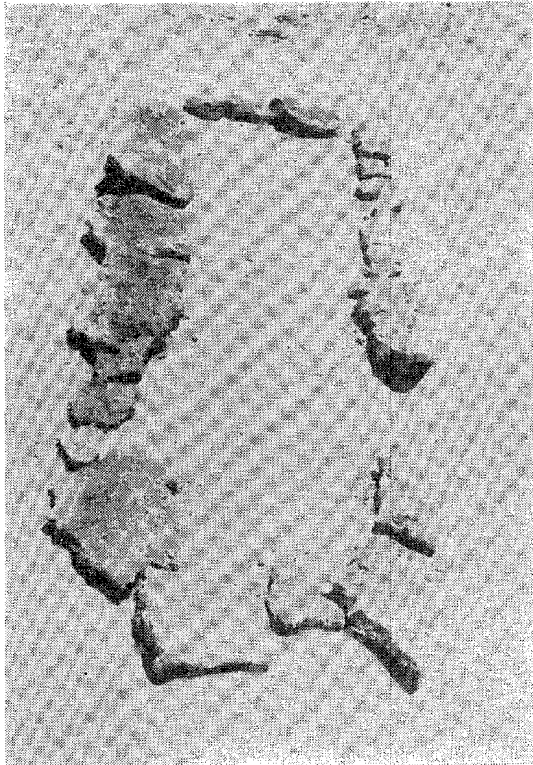


1

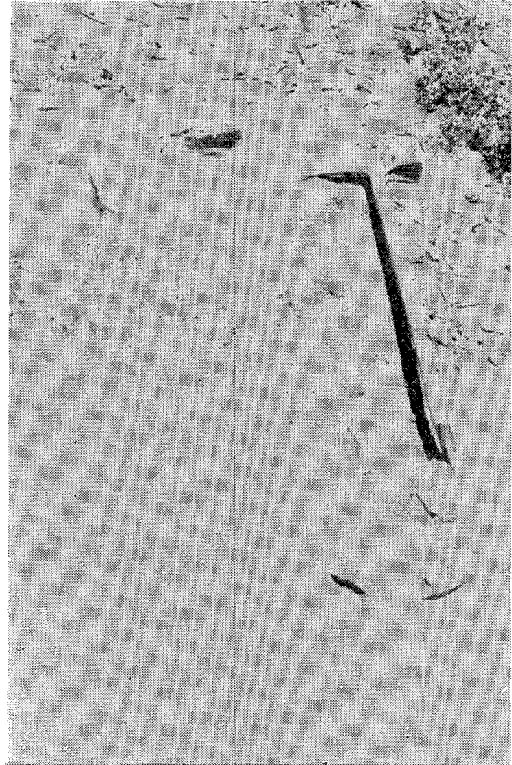


2

PLATE IV



3



4

PLATE V

Pottery forms from the prehistoric village site near Ta-liao (大寮).

PLATE VI

1,2,3,4,5,6,7, & 8. Stone implements from the prehistoric village site near Ta-liao
9,10 11. Shell implements ibid. 12. An earth sinker ibid.

PLATE V

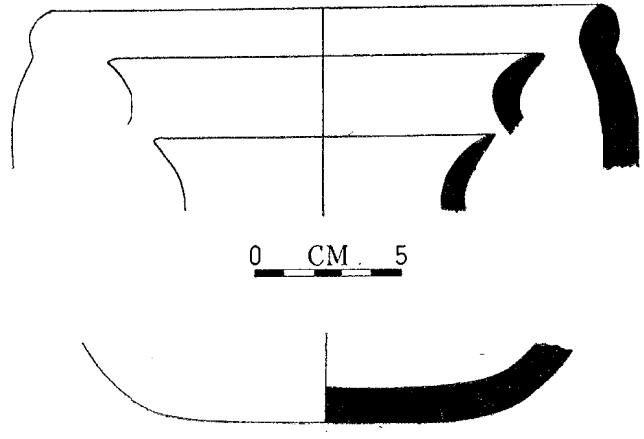


PLATE VI

